情報ネット後志

NO. 9　2013 年 1 月
発行：後志農業改良普及センター

地域の話題
平成 23 年度に成果の上がった活動
新規就農者の紹介

平成 24 年の営農を振り返って　　所長　　金光　優

昨年の天候は融雪が遅れ、その後は干ばつ傾向でしたが、７月以降好天に恵まれ９月は記録的な高温となり、作物の生育や収量は概ね平年並～やや良となりました。しかし圃場間の生育の差も認められ、その要因は圃場の透排水性、適正な輪作実施や有機物の投入状況、作業の適期実施状況などが考えられます。輪作や適期作業を実施するためには、作物の作付け品目や比率の検討が基本となります。職員一同、普及活動を通して関係機関と協力し、地力向上や労働生産性の改善、所得の確保に寄与できる活動を展開します。

「もっと美味しいトマトになりたくて！　注目のソルトーマがついに誕生！」

担当：本所　地域　第一係

昨年に試験栽培で始まった水稲育苗跡地利用のフルーツトマト（塩トマト）がここに完成し、今年は蘭越町を中心に、ニセコ町、真狩村の生産者８戸で生産組織「ニセコフルーツトマト倶楽部」（代表　椿新二）を発足、ブランド名も「ソルトーマ」として生産・出荷が始まりました。出荷は７月末から始まり、主な出荷先は札幌中央卸売市場、札幌市内飲食店となっています。

栽培ハウス

また市場評価も高く、ＨＴＢ制作番組「イチオシ！プラス」での特集や、他局ニュース番組でも大きく取組が紹介されました。

今後も生産者と栽培面積の増加が予想され、来季は約 10,000 株の作付を見込んでいます。

化粧箱入りソルトーマ

イチオシ！プラス ON AIR（8/11）

平成２３年度に成果の上がった活動

「畑作にんじん経営における輪作体系の提案」(京極町)

担当：本所　調整係

京極町のにんじんは、ばれいしょに次ぐ販売額を上げ経営上重要な作物となっています。近年は収量が低下傾向であることから、その要因の１つとされるキタネグサレセンチュウの発生実態を把握し、その改善策を探りました。

１キタネグサレセンチュウの害はどんなもの？

キタネグサレセンチュウ密度の違いによるにんじんへの被害状況を検証しました(右写真)。線虫密度の異なる土壌で栽培したにんじんは、被害程度も密度により差があり、農業者にも関心を持っていただくことができました。

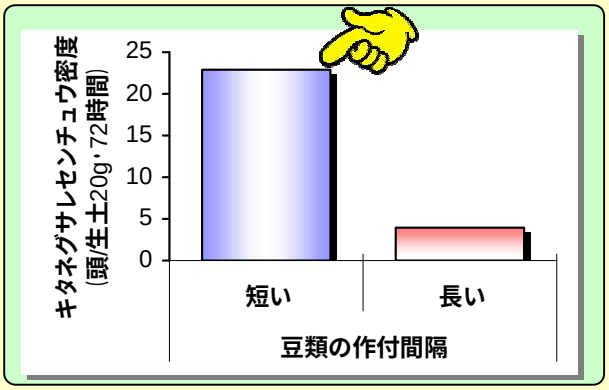
線虫密度が高いと生育が劣る！

２　輪作体系によってキタネグサレセンチュウ密度がちがう！

現地調査から豆類・にんじんの作付で線虫密度が高まることを確認しました。

また、道立農試の成績や普及センター内の課題解決研修等の結果から輪作における作付順番の違いにより、線虫密度の傾向が異なることが判明しました。

豆類の作付間隔が短いと線虫は増える



３　ニンジンをうまく作るにはどんな輪作が良いのか？

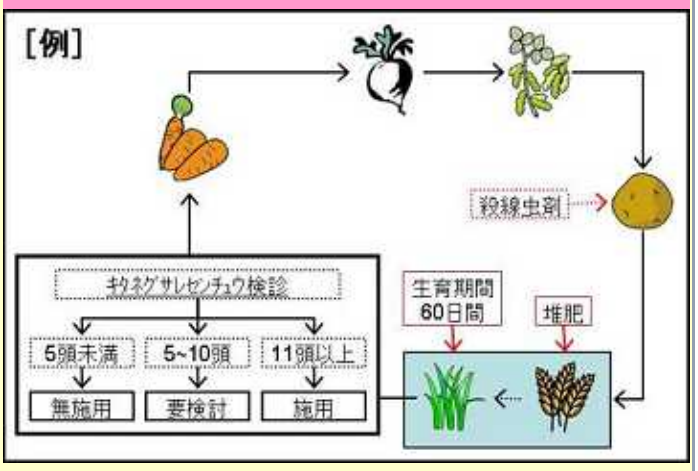
今までの知見と現場での作付作物を勘案し、キタネグサレセンチュウを低密度に抑えるための輪作体系を提案しました。

密度を抑えるための作付順番のポイント！

１．にんじんを作付する前に、
　　てん菜と小麦　＋ ヘイオーツで密度を下げる。

２．豆類の間隔は３年以上（小豆は６年以上）

＝キタネグサレセンチュウを低密度に抑えるための理想的な輪作体系のおすすめ＝



平成２４年度は、提案した輪作体系の有効性を今年の作付の中で再確認しています。また、キタネグサレセンチュウの発生密度が高くなりやすい輪作体系があるかどうか、重点地区の各農家と戸別に点検し、必要に応じて作付順番の変更を検討する予定です。

輪作体系の変更は、各農家の農作業行程の変更も伴うことから、一朝一夕では進みませんが、データを共有しながら、一歩一歩改善を進めていきたいと考えています。

「頑徹ぶどう」デビュー（余市町）　　担当：北支所　地域第一係

1　動き出した“ぶどうの郷再生への道”

北後志管内の露地ぶどう面積は 800ha と果樹の中では一番多く作付けされ、出荷が最盛期になると単価が暴落し、農家経営が採算ギリギリになることもあります。経営主の高齢化により規模拡大が難しい中ですが、余市町黒川地区農家により、ぶどう単価向上の取組が始まりました。

農家と関係機関による作戦会議

2　味に頑固一徹！「頑徹ぶどう」に掛けた想い！！

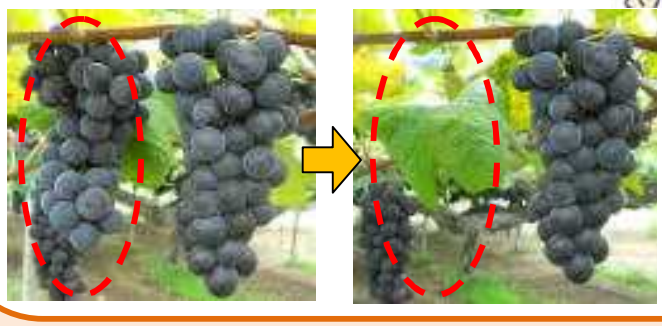
ぶどう単価向上への解決策を①収穫期を早めて出荷ピークの分散化を図ること、②「美味しいぶどう」の出荷で消費拡大を促すこととし、「ぶどう１樹当たりの着果管理」の取り組みを進めてきました。

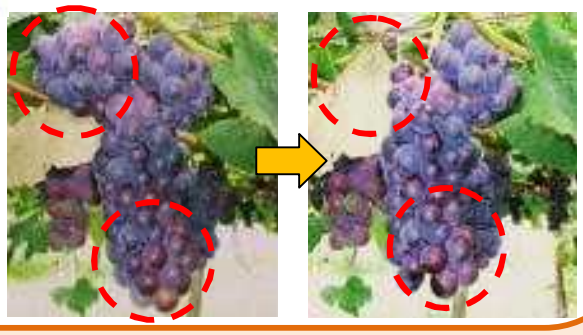
＜着果管理の効果＞

早出しが増えれば、出荷ピーク時の単価の下落も抑えられます。

＜着果制限＞
１新梢に 3～4 房なりますが、1～2 房に摘房します。

＜房づくり＞
大きい房（3L）の粒を落とし、2L～L 規格にします。





着果管理したぶどうに対し、生産から出荷までの中で、農家と JA がチェックし品質確認したものを「頑徹ぶどう」の名で販売しました。普及センターは、そのお手伝いをしました。

農家、農協とも、品質に間違いないものを出荷したいとのモチベーションが上がっています。消費者からも「美味しい」との評価も得られ、単価の向上に繋がる感触が得られてきました。

農家同士で着果管理の相互確認

味に自信ある物のみ出荷 ～ 舌合わせ

糖度と酸度の検査で最終確認

今後、地域全体に広がるよう支援していきます。

関係機関と農業者で「がっちり！」新規就農者をサポート　(赤井川村)

担当：北支所　地域第二係

赤井川村の新規就農者は平成９年以降１８人就農しており、現在では村の農家戸数の１６％を占めています。この高い就農者率のウラには村の「がっちり！」とした受け入れ体制があります。

がっちり １ ： 道担い手育成センター→赤井川村での相談

「赤井川村で農業をしたい！」と考えたら、まずは担い手センターを訪れることを勧めています。自分の志す農業経営について相談員さんと検討し、具体的な将来像を描いてから赤井川村に来てもらいます。

がっちり ２ ： 赤井川村での2年間の研修

研修受入農家との面談

① 赤井川村で農業者となるための具体的就農計画を関係機関と検討し、決意を新たにして晴れて新規就農研修生としての認定を受けます。

② 村では研修生に対し２年間の研修期間を義務づけています。この期間で地域、農家の方々と交流を図り、赤井川村民として村に馴染んでいきます。具体的な研修とは・・・

- 村の新規就農技術センターで主にトマトやブロッコリーの育苗作業研修
- 研修受け入れ農家での実践研修
- 毎月１回の指導農業士、関係機関（役場、JA、普及センター）が講師となる研修会への参加

③ 資金面での支援策として研修生受入農家に対する研修費、農地借入農家に対する賃借料、就農予定者に対するハウス導入助成等を村では整備しています。

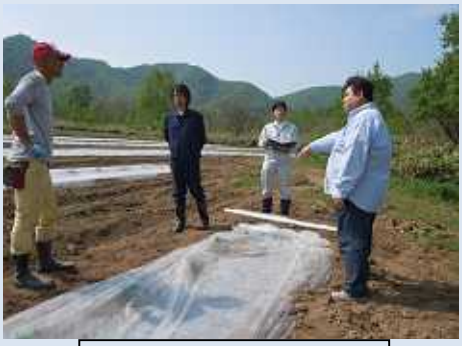
がっちり ３ ： いよいよ就農へ…

３年目の春、新規就農者として認定を受け、晴れて赤井川村農業者として営農を開始します。就農後も関係機関で巡回し、サポートします。

先輩農業者の知恵や工夫を早く吸収し、赤井川村農業の牽引役となることを期待しています。

水稲研修（野田指導農業士宅）

座学研修（於：振興センター）



就農後も関係機関で巡回

後志農業改良普及センター本所
住　所　虻田郡倶知安町旭 57-1
ＴＥＬ　0136-22-1072
ＦＡＸ　0136-22-4744
shiribeshi-nokai.1@pref.hokkaido.lg.jp

南後志支所
住　所　寿都郡黒松内町字黒松内 309
ＴＥＬ　0136-72-3161
ＦＡＸ　0136-72-3456
shiribeshi-nokai.minami1@pref.hokkaido.lg.jp

北後志支所
住　所　余市郡余市町朝日町 11 番地 1
ＴＥＬ　0135-22-5135
ＦＡＸ　0135-22-5987
shiribeshi-nokai.kita1@pref.hokkaido.lg.jp